北翼紋意氣地競 上下 全

8
4345

特 へ8 4345
へ8 4345

不破伴左衛門

名古屋山三

平井權八

昭和九年九月二〇日

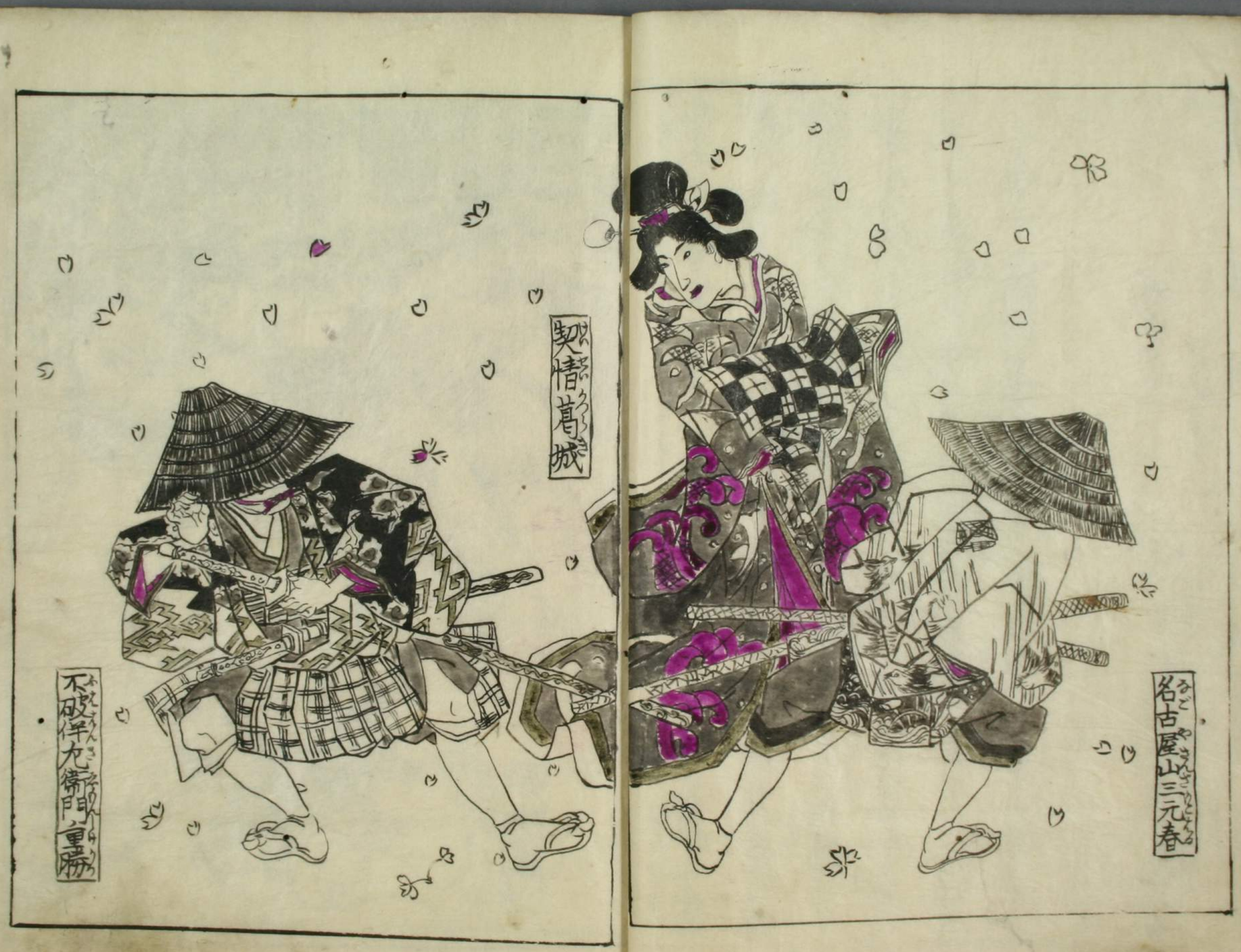
叙

歌儛伎の濫觴をたづぬるに　本朝神代の昔天細女命天盤戸城をでめとく神武の御宇に猿女乃君推古天皇の御時に百濟國より伎樂師を迎へ大和國櫻井にて舞樂を奏し是本朝歌儛の始なり聖武帝營妓を集めて歌舞ぜしむ錦繡殿に施屏子ゞ舞女を賦して詩を纏紅紫風の吹ん事を乃る嬬娜始めて片〻に楊柳の枝とあり文治のころ磯打禪師の娘靜朝詠じてゆるぎけるさまを白拍子の起といふ事を

永禄年中京都五条橋南ゆく名古屋山左ぢめて奥行き
唐土ゆくハ芝居を劇といひ又戯ともいふ小唄を曲といひ坐敷
園と唱立役を正生中以下を未と号し女形を且とりび道外を
小生實悪敵役を浮藝子を小且おかめを唱一名嫖ともいふと
ゆ東武ハ寛永年中元祖猿若勘三郎ぢ名ゆく奥行次
そもそもより歌舞妓芝居大ゆゆゆ且今世三都ちけゆゆり
諸國ゆ撥幕を儲け一番太鼓の音絶ゆ古卒ゆ御代の
戯弄のもとそもゆく錦繪草紙のたぐもゆゆハ俳優似顔
画となゆ一日甘泉堂の主人予ゲ草菴ゆ来ゆ曰大ゆる文政
六未年弥生狂言大名題浮世柄比翼稲妻鶴屋南北
翁乃作ゆく大あたりせ〜せんを今似顔画を摸寫〜ゆく飜
刻せんと思ふゆく且序せよゆゆく需む終ゆ固辞ゆて
筆城採ゆ如右著述れど聊自己ゲ著意ゆも能ゲ
古人乃糟粕を嘗るゆ似れば閲者そ〜ぢを面ゆ・ゆへと
ゆ尚追〜敷編を嗣〜一部全ゆ〜んとを冀ゆ耶〜

版元の
口上を兼

五柳亭徳升述


契情葛城
不破伴九衛門重勝
名古屋山三元春

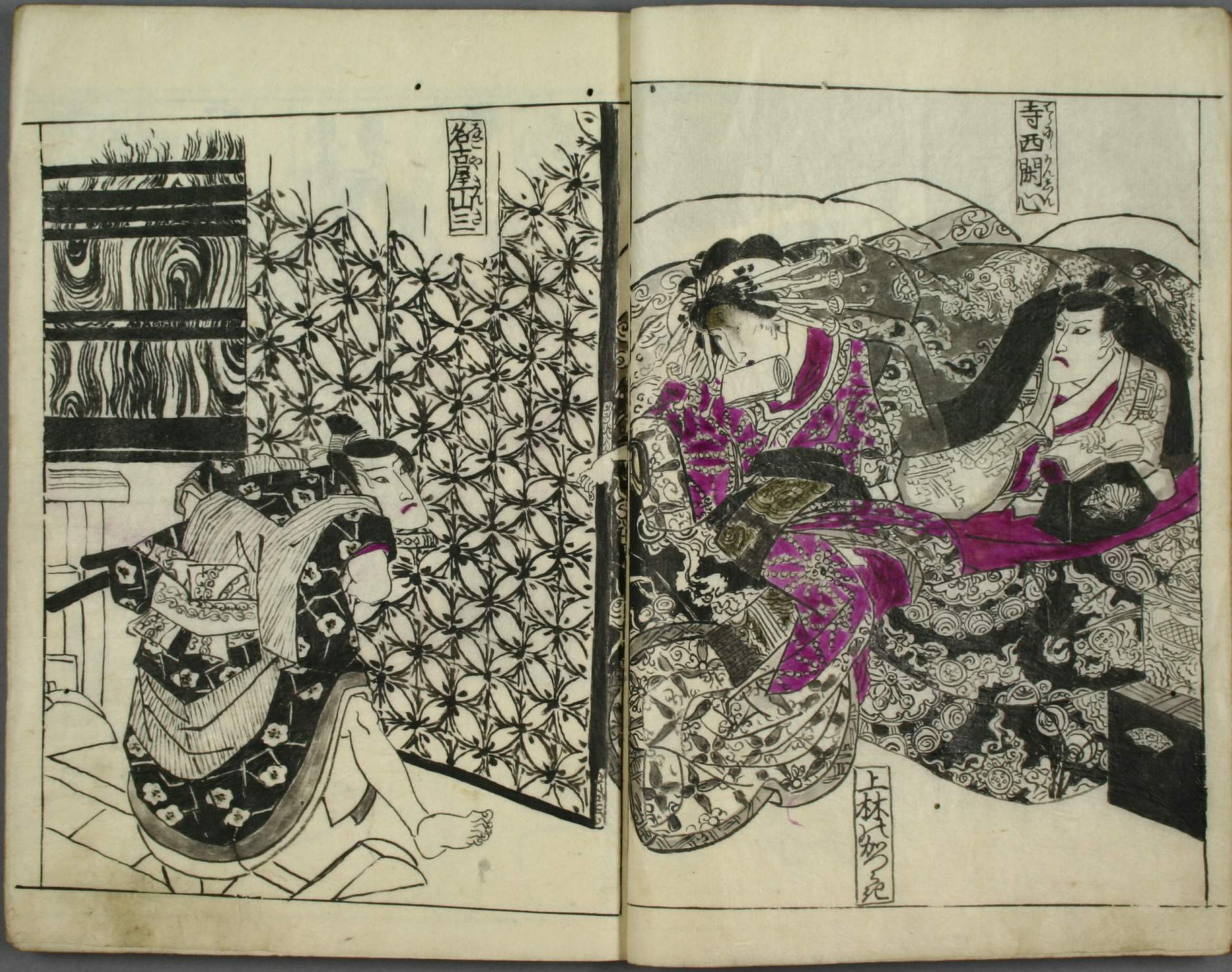
紅

鈴ヶ森の場

白井権八

本庄助大夫
絹屋弥市

月日清九


寺西閑心
上林さかつ兒
名古屋山三

桜川善孝
田孝
新孝
犬
三笑亭
馬生三序
馬生
馬之
様
壽
賀
工
茅場町
新吉
賀屋
下部
八内

壹樽
一連
情様
みの様
階隨長兵衛女房
長兵衛
子
長吉

比翼紋意気地競初編上之巻

第一章

楼閣玲瓏として五雲おこれる鎌倉山の花の春梢にかゝる喚鳥の径によむ声の長閑なる初瀬の御寺は法の庭なれば日傘も一日千本仇よ本の若殿桂之丞様ご総角乃若き姿乳人女中に供まれ数多国の武士もそれぞれに扈従て来りけり住僧東坊出迎これはこれは若殿様には亡君の御追福として当寺へ御参詣天気も皆晴まして大慶至極花の如くなる御装束の席へ下へ一礼なさせば桂之丞幼稚なれども物義正しく●住僧には出むかひの太義先例にまかせ此この對者にて旅計れかし ひとり無く通り中ホーつ客坊へ会釈あり●路次のけいこの各々方も御苦労に存する権柵とのまゐりこゝハ大殿の逝去の後御家の督はいまだ相定まりてござらぬ下向れし柵●これはこれは深切なるそのお尋先殿定次公御逝去の後未だ跡目ハ定りませぬ彼より未だ其の才能共ぶんぶん見足迄なれば ちと我ハ重次様乳のもち●御家中ハ御惣領なる額五郎さま又これなる桂之丞さまは御両公まゐるが

何ゆゑ御家とくハ定りませぬナト不審相応に妹玄蕃さまにも御出なされど其方と云ふ下ざまの御上の事を知らぬも最国にて二入りの主あることは御家の騒動折角治る体と本なれとも世子ハさしづめ悪敷しければ御家不和なる不破伴左衛門ハ後見役にて主ある柵むつとして●ごとおそれながら玄蕃さまの御事は御親ではござりますれど家の事ゆゑハ妾腹にて桂之丞さまに二男ながらも御年ハ下なれば御家督につきてハこれが当然ゆゑ御代とあつて後室さまの御心なげきいへぬ事ゆゑ玄蕃さまのそうぞう玄蕃さまにはおそへの浮沈をお気ひろさるゝ●イヤ柵どのお言葉なれど依て本の御家督さまにて叶つめられ玄蕃さまの●イヤ柵どのお言葉なれど依て本の御家督さまにて叶ふ事ゆゑ神妙剱の一巻たとへ桂之丞さまにもまよその下知がござりまするか●サアその非妙剱ハ白井兵右衛門名古屋山三が預りのところ此程国元より下向の道中にて盗賊に出合殺害され剱一巻までうばひ取られ科によつて白井の家ハ竟に断絶名古屋も同罪なれど子息山三ハ桂之丞さまの御詫人なるによつて素意仰つけられて御免されてハござりますれど又でも御代つれまする事ゆゑおそらく

桂の外●かゞぐの心配さるゝに及ばずそれがしは二男也家督のことはおもひもよらず趣向ある額へ
みどの済目をうけしは毛頭流しきしより無の才藝無きなりて●アゝ我心よりそのおとこそ
草をとりけても家の後継を傳ふあるべきを此代に出せさんと思ひて拙たのむ●それ故にても
当寺にかくかく佐々木の系図は祈念あらむるよりの由緒例そのあかしは名古屋山三
との●右まつ丸がひ処は一封なり何石掃の家来名古屋山三さまより不破伴左
衛門さま大名の由状もおれ若坂まで届けよと仰つけられしかれど未だ伴左衛門さまは出生けれ
は悼みがら此同役であるさまよりお届けなされてでござりませぬ才藝あふ家出生も世間に佳傳
と云き事きけるより●いかにも伴左衛門どのへ次第でもよう申さしは何でおかうトいふ間に
もうつくし●宗も祈念の時刻にござりますればいづれも御拝礼あつて人々ぞありぞんじますウトの
しれば桂の外は茶をうちわらひ●かさぐ茶肉●ハゝとこたへて同音に●イザ入らせられませうト
うち開きて入りより未あるる佐々木の藩中がき風流の雛男文武すぐしこき
梅が香を振袖にかりし杜若紫の若衆の裃の礼儀ただしくも名古屋山三也

白井権八もとは名だたるものなれど思ひは一ツ花に狂へる雛鳥みえとれてたがひに一人りど●弥生の空の
長閑さも怪しむべき花に来て囀も浮きるの法の庭●その声まさる花鳥がねて空
に花の色と鳥の声も那の親の情でそだつ身が●これ父母の家を忍ぶ身なれば
消し陽炎の●ながらひの恋の意地むすぼれてとけぬ糸遊の●ながめやうつる花の枝に
来る鶯の巣をとられても●現に親をそだて良い●氷まとる鳥●今やとは
るん●ハテ風情ある囀りやナアトいひつ来る折も人合せ●あるさはは名古屋山三さま●イヤ是は
白井氏此程はそれ面会いたさねど清談にこそ事もなく●あまゝも一向出張結構にしく
●イヤ何権八実父兵左衛門殿は先年不慮の横死そのみぎり神妙剣の一巻紛失その
落度とありておま家浪々の身のうへなれど亡君の御恩を思ひ此御廟所へ忍びの
参詣よるゑ●仰のとをり其方が釈もともまうしあるその所実父山左衛門同場所にて
も今宵此家見るさきすれどたがひの親の敵は誰のこともそれがしは若輩まで父にわかれる孤
ぬとゝくことゝなれて我々もいう兄弟の義をむすびともすれば共侶に力となりて仇敵を

同胞の誓約なさどりリヤ私事敵うちは侍の表むき随分かなゑて済させくだされ
そのかはりには●未だお忘れなされませぬ●身どもは存ぜずなれど無念な亡父の仇あさ身なれこ
わたくし詮議せんより侍やめて当世は浮世を楽しみ色と酒●さりながらございあるならわ
敵をたづねるは所存にござりませぬ●されバサあれ我ら方は中々ゝの身がはりござりまする十二
身がはりとは●親山名ともなれみきり帯せし刀は来国俊その場で紛失いたしたまいぬ
これぞ所持する者めこそ父の仇まづくぞその刀こそ雌雄と号して二口在名古屋の家に
伝ふる宝一トふりは身ち帯する処焼刀鉄色寸分たがはず奇代のつきもの●さるまがり
のあるくらは拙者が為にも父の敵●いかにもく心あんせてまるくだら最早ての難義がござる
ちかごろ我ら眩暈のやまひ●あまた今にも敵にめぐりあふとも刀の光りを見ると死ぬも忽
かかる持病ゆへ当分くら討れ止やく●それからあるらぬ眩暈の●サア其病ひがあるゆへ
御奉公も勉らぬそれゆへ伴たかまで書状を以て暇ねがひ今よりは傍やめて田町へ
堂々しく●ゆゑく此亡父の仇は●討奴遂扨は侍女のアノ君枝をば鎌倉して女の女房●ヲヤ

これまで約せし兄弟の●義理ゐるみなさて武士道をたてゝみせるも只今その下●ヤア●ハテ
野暮をいはずとマア来なされトむぎとりて寺院をさして入りふけるあとより立出石塚玄蕃
所化の雲哲つれそひ来り●玄蕃さま●コレトト見廻し人なきゆゑ●かねてお預けの一義今日
の混雑にまぎらけますせう●いかにも山三が預りの木家の系図祈念をいたしお持なさん
統あるうゑにおいては見むづかしく寺にあるうちは中々もたやすく●兼知でござりまするとかの盗
まぎれますまい●扨こそ系図の針を堅く山三が封印あればこれゆゑは当惑●ハテ此気遣
進ぜませうへ●其系図の外に入れ替てくだされませぬ●ボク拙僧
入るの主のるいぞんせるも盗一ト通りのこともやつてのめてくださりませぬ
玄蕃その一言系図さへ手に入りければ山三めは主家を追放させられば家をたてゝ身もあらかさ夜伴
たゞ我が存じのまれ家の政事そのときこそ望次第まづ当座の褒美あへと懐中より
包の侭まてさし出せば雲哲うけとり●コリヤこれお金●かたじけなき心得ますとふところへ
ゑて喜びたく石塚玄蕃一人のこり●ころ得ぬは寝お山三の伴たつなどのへるとは気にかゝ
書状私が完封して中のぞうすと下ノ手紙とり出し封を切て上包をとり棄れば一見

すんとまち向へけふの内供のおれぞを花の宮のちこえ岩橋殿のちきりも葛城神
あ〜なやの自髪の親父目傘脊屋てあとりこぶく奴八内ぶぐちてむぐにまぐ水
とりけり。コレ八内どの泊沢寺ちぐらどあるうの。これをそうにそたさるとーるぐ
ど寝がするうち初沢ちでござりますトいそそ親父八胃そのだ〜。イヤモウ娘そその足
ぐおそいよりてそどもまで内供ふれさヤ字ちてあるきませう。それぐらふ
て草履のたるをで足といあて一足もあるれ世ば。あかりこ異然よれであらうコ
ゲ亀てのりまそうト立寄れ。アあっこいるの爺さ夜でうてなまふトちんそそまぐ
奴隷八内ふちんさうる。寝ぬるうに異様さ夜ぐけ三年どのるると爺さ夜とふうふる
おるさんの。ハイ娘でござりますト少て八内呆れぐ。これぐ九んの者ぐ魔ちとや。これ
いぶつけちるーその兵は娘八元来捨子でござりまん。アー爺さん人も問ふ所のえ
ぐ子とうち消まちるら笹才ぐ〜ち出く。コレ〜三年寝ぬるう女中衆ぐ日傘を
待ちそてぐ出くちあく来れトうち連ぐちてなふりる岩橋もあるづ化。ぐんこそこ

寝ぐ寝ぬるう〜お供ふおこれれおの内橋娘いぐ〜いトのひつ行を八内ふる。ま山岩橋
さあるたのお草履でいもぐ足といあますこそ〜ぐ逃て上ますわどまは紙冊と歌
そ内後ぬされて下さりませト紙冊こり出るる坂〜るせば。コリやるんでさんまえ。サア其
ちんぐ〜い紙るお方ちる〜ぬるこぐけて〜れいと頼まれまるぐ忘よかるひまりさ〜ぬ返歌
を。ヤこの紙冊八男のる所情どこあ一首の歌シテ其女方八。ぬ〜ぬるうの濡態
そんそトア。山さある。アコレ伺ものいりぐふ返歌の一首ぬれらんその内ぬ履ぬ
せんさてトいひつぬるの履とるるちち出ちて娘〜紀とうまて懐中のをとちぐ
彼紙冊のそのう〜紀華ゆて書返歌さいぜんちりあうも寝ふ石橋玄美。ヤアいつ
のるる出拵どのトいるるくぐちち彼紙冊をるぐやかし。あるる石橋玄美
さあ今日のお役目内苦労ふぐ〜ぬるトいんきん接返ぐ玄美ちりそひイヤ
土出ちどの早速ぐ拵る仕より頼まれまりこぐ此紙冊ふ返歌〜てトさるまん
うトさ〜出ぐ岩ちるまち。この紙冊ぬも京歌の一首シテこのお方八。ぬ〜ち

則雲ふ稲妻。そんなら、これが。ごう毛色よ出返歌を。ぬつうる私へおそりかつこの紙
冊早速返歌いてこれれど扨悪き足のいたこ。アイ〳〵。玄蕃ハなぞう犯岩ゑんどの
いでめされこ。只今これへまあるまする道こ草履のたる徒でらくあまりさ。りやかりこ
まあが少まくでござらう扨こ憎い弟履でござる杜者が一寸ゑて進ぜませう。ぞふ
いてまりて恐れ多いあるこさ。ハテ。ゑこうあるまあ。おるが出てトあるこそ中へはつて入て
さうまいト部相應ひてらが立て進ぜませうト八内ひりそへ玄蕃ハおつと
。ヤイたりけめ。なるまハ今日若殿の出荷物こ預りみがるむさこうふ女の弟履找
弟履とらこがあるのう不埒千万ヤ岩ゑどの出遣こあるハおがぬおりなきれハト
無理こさうまこと言ひ被より以ての紙こり出何心なく鼻紙をまゑて
下まおき。コレ山ゑどのはやふいこれもでうを先刺の出返歌をト持ち八内かゑ分
てイやくこちらへ出返事を。イヤ身ども〳〵あるそへば岩橋たへ。それ程まで。なり
やて下さりまいハ女子のあるう姉いれれどごちらへお返事いたしてもいづまこ二人ハ

片思ひ恋ハとさこ遺恨の種それを思へば。返事ハ。ぬとキスのうこれ
ならりハト迷惑相二人ハ推てたがごさうつけ。どうもそれを返りと内こおれがひ
まうしまこ。ア仇ろこいでんでませぬト硯冊ちつけ入りふけり跡まこ二人ハあつけ最
られ。ア岩ゑどの迫こそうこト二人ハ岩橋ゑ跡とうこて入りはける折ろ所化
八内ハ岩橋ゑ跡とうこて入りはける折ろ所化の雲拙言ちのび出。玄蕃ゑさあまえん
まこ首尾よく祈願所よ飾りあこ糸屋の子巻盗ろくまありまこ出玄蕃ゑこく
介一皆ハ山ニが封印切ゑどいてこのやれいでいこうめでおらう。それハ私が
仕ようがござります一寸小柄をあるうるされませト玄蕃ゑ少ごを借こりて紙のそこ
をこごゑ中より一巻ろ出こ玄蕃ゑふこう。此をこハ元の神前へおうしムまり
ゑそハトあるう迫。幸ひ家こあるこさごうまト件の岩ゑどゑ出て針をしめ
斯ておけば雑ものれのつくめハござりませぬ。玄蕃ゑハつごえとうて。好ひくさすが
雲拙ちつともあく。心得まこト雲拙ゑ紙をりへて入りふける何国ろハ一羽乃

鷹は花に狂ふて菊来る石摺玄蕃佶と目をつけ●花の梢にアノ小鷹麿たーくふ
殿のお春なるらんトアノ処へ修き木の若殿顔五郎麿野出る手の内辺あるなるりえぞ
跡より六角左京つれそひ来てあさ侍なるより熟なら世に出て●殿づん強乱の鷹なれど
あやすを離れてアノ枝へ足皮かくんであれくトあせれど高き梅の梢玄蕃なんにて貞を
つく人●恐れながら顔あらさ夏中上まん先刻より名古屋山三出仕いてーをりまする
彼は命じて鷹の飼付村切らせていたでござりまするト彼より熟あらうあづかる●それ
こそ幸ひ山三をこれへ●ハツトここえて同音に●山三元春若とのお召なるぞト彼よりもお召
なくとも山三元来お目通り侍るトいふてふる出仕侍なるより熟なりて●若殿さまにいは
亡君の御廟参りと思ひの外なるも忘れきけ逃攬老臣方もれそくるりてまりながら何
先お疑め中されぬぞ●悼なから六角左京の後室の御意を受け内跡を差たひお詫免
ナせどけるのちおるる目ごろの心気質●や益ゆもたらぬその詫言ト言葉お続ふつく石
摺玄蕃●山三どのいれ秘蔵の鷹の羽をふ自ぶつ是ますあの二丈に余る梅の梢に足

皮かくむアノお春このまゝ置けば鷹の落命武芸自慢の元春どの射術の程が
許見たくしれ●これは思ひもよらぬを仰せ出なれど拙者眩暈の病に犯され剣ハよけ
射術などハ存寄らぬだト彼よりも玄蕃世たてる●ヤア見さげたその一言イヂ
はらくハ六角どの若くば某及ばれるがト六角左京半弓を携まて神ひをその通
放つ矢先に鷹の鬼法切てあるまで飛去れバするら向ふは義貞立て●只今それハ
お春これゆくそれ不破伴左ハ重勝持参仕りでござりまするト鷹とてお手に入るも一入
たち出れバ皆同音に●重勝どの只今出仕めされましてござるト彼より重勝ややしく●丸
人生れてより一生を終るに五運六気を持て誠るてその是を拵く何ほ見え軍法の弁
一と定りても国主の嫡子今此処に御座あるとて天文ゆて察しなりとく
より冷出迎ひと存ぜしとてろ羽毛のーゆら君の御秘蔵鷹はよく人の気をうたばひ
るもの公をのちおるお飛べくト君にささげ在り敬れながら御けん鷹の爪よりて京になるび
有るト彼より顔色あらほに笑て●扨の面目他の彼と伴左ハ近う●命をばお免下さう

ませト坐に附ば山三元春●これく重勝との御家来諸は若党にそれ〳〵まするゆへのぞ
けれど石塚玄蕃●や斎藤元春どのより貴殿へ届けくれよとあつた今日の状ト件の
書ハ差出せバ重勝うけとり●コリヤこれ封印がされてござるよりまして玄蕃●其儀ハ
家あお貴殿の出仕遅刻ゆへ火急に参り同役の儀なれば拙者開封いたしてござる
●然らばござらバ皆ござるト懐より元春うやく〳〵●重勝どの何卒御披見の上
詮度は推許ねがひたてまつれ●何かはまた存ぜねど渇き一瞬見のる人下書状とひらき●私
参君恩ありがたく存奉り此処此武辺家の眩暈の病ひに犯され武家のお奉公仕りがたく
これによって貴殿より言上あって永の御暇下し置れたく御推許希ひたてまつり月日●不や
えちろどのは眩暈の病ひを永の御暇ねがひでござる歟ト一同に驚き合すれば六角左
京は眉を顰め●これこそよひ親子は父の横死の歎きもなく媱酒にふけり所の放埓
草葉の影の山左衛門家来の後まで武名の恥辱トそのとき重勝居並て●今まで
縁であつた殿のお目鑑ちがひといひ他家の嘲り主君へ不忠さもあれば山三は縁盗びと

●卑怯なされ重勝どの拙者の病ひは仮病これまで聊か主君へさいして不忠いたさぬ山三元
春何故に禄盗人とおいやるのぢや●いやや〳〵さむとて何ぞ其も暴言でおらう治国乱世とも
われらは武門の数国を反逆の者あつと時は剣がれを以て敵をふせぐが臣下のならひそれを何
ぞや眩暈の病ひとあつぱ署抜け同前禄賊とはこれ重勝があやまりか但し無念ならば
われらと此場において真剣の立合するか●サア返答いたせ山三元春ト云つめれば
殿前より小ひげぬいて返す言も手に取る●元春のおがむ重勝さま暫く
お待下されませ●なにも白井権八待てござる其仔細は●おさめやう存るは元春が病ひ
仕らうと存じます●いや何故に●ただ今元春申されすと仮病ひそれを以て立合とな
あるときあは勝ちすと殊に未熟でのお相手でござる比興かと存じられます●理の当然●石
塚玄蕃進み出て●比興とあるゆゑ悪心千万殊に殿より御不興を蒙りながらお刀を
下難がありてこそ出さぬ〳〵大たはけめ然れども身分を思ひなよ山三が名代
その方立合へト横に車の重勝が権柄に様八おそれて●どふかして私風情が●イヤそのやうに

卑下なさるゝ此場におゐて武術の立合その方がうち勝バ山三が科ハゆるして取らせ
ん。いや私めがこの場におゐて万に一ツうち勝バいかにも拙の言葉を立てうへ。ありがたう
存ます。その方が相手にハ石塚氏立あひめされい。ト皆々承知。イヤ権八が相手にハ
アノ拙者がいかにも若輩ものでござれバ以後のみせしめ挪てくれすゑめされい。心得ました
さ。御近習の方なるゆゑそれがしこまりました。ト双方より持来ル木太刀重儀なるけ両人丈
度せ。パツと居て身がまへ互に二タ入り一度にあうらひをあつてう立あひが何の苦もなく石が
げん蕃持たるあふひと打落されしてそのまゝに打負れば重儀いろて悲敷なるあひ捨衣
権八にあて覚れバ身とてハ一秘術を尽して戦が権八が早ワザに重儀がなるあひ打おとし
かいくぐつて一トまて当れバ強気の重儀たちまち権八するさびうたんとするを元春是経て分
て入り扇を持て これを制せバ重儀ぐ手刀に持切てかゝるを山三元春そかし
受留ムども白刃の光りふたゞちく恐れあくまりさまを刀ろより入々元春どの式律ハ
いかゞ重儀。印ちがら彼が御申。いや虚病をさうまへ両家退去ハ禄の不足かト

角左京が絹を以て山三ひれ伏。全くもつて。國藤加へて勤仕めさるゝ。サアそれハト争へど
額五郎。善悪ともに仔細もあれば権八を寺院へ来れ。ハツとこたへて一同に合に
御前へ。めぐ案内。先へせられませうト一同に敬ひ固すてぞ今にけ跡に重儀石塚
玄む。伴左衛門どの。コレとあつり廻し。件の一義ハいかであされし。仰の如く所化雲母と
中へ会せまんまと首尾よく系図の一巻重儀どのイサお受とりめされい さ出た後に君
の御手へ一巻わたひつけ出た向ふにエイとうろに裡剱重儀けんぎ白髪まで立の奉書
氏。お驚きあらる重勝どの助太文でござる那にそ出で来一刃せんかくをまへ入る式一ケ所へ
持てゆけ出た曲者をるに忍びし拙者が身のうち。流石老功適あるのぎ恵み狭する義も
ござれバまづ是へ。あつくされ急ぎ下されハト あつく通れバ互に密ぞ。お歓びある助太文どの
系図の一巻をまへ入りまする。おの掏へその一巻さへ手に入れば兎がどのそれ御暇にまるる
またくらち。さへぞそよる白井岳尾に名古屋山左衛門より下向の道中人知れず害
これが息元春権八も両家退散ある中せバ心おくるまさてみ。揃ろる白井岳尾にめしえ入

の息子兄八弥市とも七眼病史國に殘り弟権八は若年なれども忠義の武士めさ
ふ心なるされば其の心配は言葉に盡し難く貴殿と叔父甥の中柳をもつて親方より入れ異
議を及び真二兼和いとあんどあるを重傷とのあるまい方事は調へと兵庶の子息勝
市どの東海道境木よりて神妙剣の一巻うばひとりその場より行違ひ
義もおろそかに思ひあるを勘当いたせど虎の眞情とあるそはなびくまじ
を貢民好武士宣情どのあるを和の孔ひとりスハ仕組とも飛ぶ
女の岩搦る強の外なる孔心玄蕃ものの小頼一短冊の返歌いつでござるその義は山三
が奴隷八付これも同じく恋歌の短冊及方ともに小突戻されと面目もござるまじ悔中より短
冊を出し併たつふる優しきやコリや某が短冊なるずるもの雨の濡無事裏表に紅をて
一首の返歌「君ゆえにいく枝もなれ折れ梯花外山のあらしいとうるるれば」スリヤこの一首
山三返歌シテ身が態ざくいいぐるされこそ其の義は家来ちゃ夜ろ
こと相ならずスト申すより助ちゃ其の付とも七郎が家来ちゃ殺ぐ

ようだて内こそ乱ぞこかうせ主人眼つろうせが兵今ゆえ山三ゲ下ろうろ
まぬ山三ちまの家来の頼ひとりひ常よりー言葉のたしぐ遺恨ろる
若吉屋元義あれその侭イヤ助ちゃ主人の後刻は意得ませう玄蕃ものれト
ちつれ入り小ぬ助ちゃ助ちゃ今と無の不敵名吉屋ハテ口ぬる武
士ぬるト独言折て権八たち出そこれ叔父人いまご見ぬ出られ
て権八長今兼れば其方ハ出家ぬおいて時る勝負一家中の尊某い元り
筆墨の影の兵庫ちゃ心弱ぬでありう有りぐ元其の作両親そもるに式ものの
よりー叔父甥人イヤ頼むの悪まのとアスハ他人同ちゃ方と叔父甥の中る
れば所ぬ作の何ようしぬ出ハせまいナこれ作叔ちゃ元い叔父人
和何ふ違背作ませう夫ぬ先ハ安堵命ぬ作のるようしぬ所ハ山ちゃ違
肖いこまとの藝彼ハ元たんや何と作家ある。ハテ祝る紀後ハ叔父ハ祝ちゃ元いこ
ぬ金打いこ。何ぬ存ぜぬぐきんてうとちてハ。ウ。イヤ金ぬ作て命ぬ悪

ハツと養ひさて涼しき所に持てうくと金打ちすべ通れ金打ちて渡けて。シテあるこの山本
殿ハかだんいたせ。何かたんとい大殿ゆ通ちの後も今小当家の山家督不定ある
ふ家中ものめんこ二ちふ別れ中捜さる桂て助どの代継とうふ別れ心ず任せび
夫面人今育茶ふとうを毒殺すて山毒殺する頼五郎どのと家臣とるこ我本
望とふとそい乱ゆこどのそも遊てうづけ佐藤の家と抽賞せび其所とも立所出
世スリやあるこふい家臣をそサかどんいをば約束なるる神剣の一巻も三日比
たづぬ一巻とやそサ真実かどんいこえば取こせてれう。スリやひく神剣を海
心ろ武士の金打ねたいさきれ毒二のひこどそれで所どもを安法いこかの唐土を
義を結びい桃の花園。それい兄弟これ叔父甥。接の花の下草ふ義をむすび
たる叔父どや人。接八ハ二上長ふを折ちそよトいひて立て助たま禅のちりと打ちう
ひ徐々うど家へ入りける

比翼紋意氣地競初編上之巻

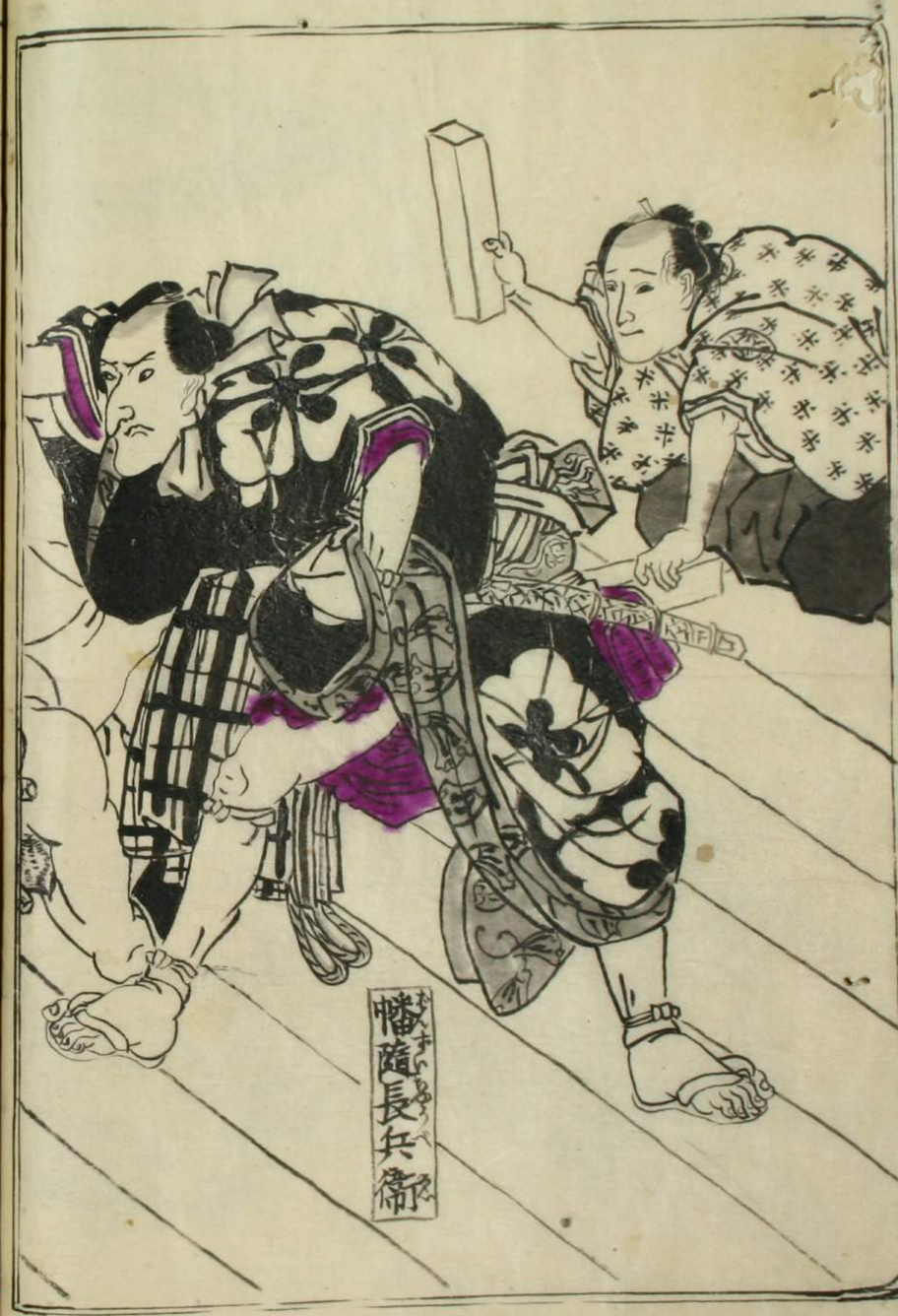
比翼紋意氣地競初編下之巻

第一章續

接八あとをとんかゆて。思ひ出るに叔父どや人の邪無助の郷ふかまれて是非ろく
かだんいいこたもど此侭かけば君のお命今育まゆる桂の双さ面ひつそうちはし
ヤ上ううイやく他言ものど武士の金打ち上ねば君への不忠口外ものど不孝
の罪患者士ちの御ふつに接八ゲ刃の一生けんめいテ心ぐ〜に今この時ト深恩
のとろ名吉屋元表立ちく。そこふ長ろる自井氏何ものんのそれ弁ハ亡
父のすどもおりひ中ての代悲傷。日ごろ〜芝公ふ長ろる所ゆ〜〜〜
君ふつふるその因ゆ芝存ぐふも心ふ仇せび彼保元の乱れ中ハ勅命とやもなぐ為義
義朝ろれくよ敵外方親を討ろる源義朝ふ未世ふのこに臣下の鑑何と係ろる
忠義ものふ中ハ敵をもうつが臣下のろ。世ふのふの刃のうこそ難面のでい
どざ〜ゆろ元春さあかさ〜ぶでどざりまあ。コリや接八ろそうかそそぶれへまある

侍女岩橋
名古屋山三

白井權八


幡隨長兵衛

●たゞ今にて恩愛の二字が重なる人我心によつては●親をも討これよりすぐにト抑袂
をかりたる一屋形をさしてかへりけるあとへ立帰りて元春ハ●仔細ありぞ権八がふるまひ
ハテ心がゝりなるト深思のそふる急ぐに●殿の御帰舘ト呼ばれば元春心得ひかへ居る
佐々木の若殿顔尓郎桂之丞を先として乳母柵侍女岩橋大ぜいつきそひちかづき
より六角左京不破伴左衛門石塚玄蕃警固の武士もそれぞれに附そひて来りける
折から住僧をはじめ坊白木の箱をうやうやしく持出で●名古屋氏お譲りの佐々木の系
図の代がはりの為当山において祈祷いたす吉例則今日満願なればあづけておく下さり
ませうトさし出せバ桂之丞●封印ハ名古屋山三とて改て舘へお帰●ハア勿てあります
しくトあらためて封印をきつて箱の内改め見ればコハいかに系図ハ紛失●ヤ御家の系図
と思ひの外うちにハ片足の此草履トきくより皆々おどろけば石塚玄蕃立出て●無
あいさんお前岩橋どのゝ草履の片足●察する処だれが捨ておきしが此草履でなくて
なぜこの箱へト岩橋がおどろけば家来ハ声々に●系図の一巻あれとかいふ声あふち

一大事なれバ此せん義の屋●ハツかしこまりますトうちあがる●元山岩橋名古屋元春
すでに濡ませう●ハツとこたへて両人左右よりとびかゝり座にその重勝●山三をたちまち
罪に伏して縄かけれ●何故あつて我々を●知るまいと思ふか先君の逝去の後御家督をば定
められしとき御附人なる乳母小悪心の為にようて御代継ともならぬにおのれらが僕に
すゝめ今それぞれさまざまにけんと系図の一巻押へしかよき家来附人なる桂の丞さまを
家督になさんたくみてあるらうがな●ヤア汝が知りてくれ詠くもそれその一言たとへ野心の為
申せよ女でこそあれそのたくみふせんやたとへをけてとて但しこれに證拠あつてか●證拠あれとやさんや
●シテその證拠ハ此短冊いらふえがござるうト以前の短冊さし出して●模様は雨の濡燕この
短冊に恋歌の一首　うしとこもけふに逢ひ見んされバ恋かゝるうき身の中ぞありける
コリヤこれ正しく山三が手跡●サアそれハ●裡にあらく紙筆ふして
さ　またそれ桜花外山の嵐といふ所なれバ　この返歌こそ岩橋そちが手跡であらう
●サアそれハ●ふたり心を一つにして系図を盗すとてその跡へ重ねて証拠に此草履まつさき

不義の大罪ゆへひつとらへ山三岩をも●サア／＼●いひわけあらバ重勝がきこう
ト以前の草履をとつて元来より打たんとすると後より奴隷八内走出
伴左衛門が其草履をうばひとらんとするを重勝おどろき八内がてをおさへ●下部め
何をする此無礼●おでも大事ござりませぬそれも大事ない●何がかんと宍戸より後にて
出てそれがし元来岩橋殿と家来と密に隠せし作らふがおのれが主人を殿を
此箱へ入れおくときハおのれが罪をおのれと訴へんとたくらみけれどござらふ殊に此の身の
猪を差し反古をも其主人山三よりおさめへまかりくし御状の封紙を当て
則不破伴左衛門名古屋山三そのちで讀があらふこの反古さまと然ハ家来の盗賊と
何もかかぬ重勝どのト此より玄蕃をかへり見ていよ／＼きたぜん●ヤアあなたへかござろう
●イヤ家来の一身さきに岩三人ハ不義の大罪ござるトのあるそ重勝が八内イヤさ
其不義でござるは其の不義のみ外にあつし短冊ハあなたへござらう●ヤア村右衛門稲
妻ハ人も知つたる重勝が宝物としてよみ賜りし短冊●サそれが●いひわけござらう重勝が

●久しくも恩外の家来の思ひきれト重勝が力のつりよせられば桂の奴●かく／＼扨よ
成敗あつての事とて霊場法の庭先を放つ大法會血をあやうさ宗廟をもて
も双方とも此角左京より伴左衛門へ●ハワかしこまり其身腰元岩ち不破名古屋
よそれは三人●ハワ●甚方ども二ヶ條のゆへにつけ立かへつて既に法の詫りを承べた
所格別の思召をもつて助命中に付永のお暇下さる間ありがたく御請いたせト申より
重勝大におどろき●山三岩をいふ何とも角も何友村有も家の法には●何角ハ其身
におもへおらんそこ下あきらに一味合併やうにもすれバ野心とも●イヤサ鎧の法度
ハ不義密通艶書の短冊露顕のうへハ三人とも科ハ同罪●いやしく拙者めも
ハテ思ひがけない●岩をはからぬ事これといふのも皆私がいたづらゆへ此身の科をと
いへとも●何卒主人山三がみのうへ今一應御上の御差圖を断すらくとたのみ
ねども此やどそれがし眩暈の病ひによつておいとまねがひ●此病家来の御いとまあらつ赤
帰家来もろ共に出世うに不義ものゝ今のかたのうへ下がりく出立ち一●発向の人々●暇ご

出れば西人とも茅刀をさしこめさまこんと云かまびたる糸をうそ。何四へ退きてよ
刀をくくてハ尺ぐ〳〵二刀ハ伸ばす表ハ法ぞぎれば肩衣を心得ずしてたちあがり不
破と名古屋ら肩衣をとりのくれば羽織ける男橋をうそきのふまうるこのあなたと
浪人をきれとも下郎いまること出二所よりハ内いるろく汝。左ろねばひるれどけ一日ハその
方後ハ殿のち供役月とうばい傷るひ男。猪母うどぶぶおもいてこの重傷有
業月得人とのろうど宛二月見くたびひ夫名浪人やそ帰糸ハお家の系号絡
矢をくる神妙切ちれ出さば家貧くさづめこの元まが絶絃いてそ
とよ入りるば。茅ろも代絶いこれる桂の刈。女人抗交心得られよト左糸ばてこだ
重傷元まを年伏ろ。いさいうこちりまくことのとこ俄小雷ばるそぶい角左京ハ西
君へやよます雷まれ信ます。まれば出帰敏あって仇ばべうそ小ばりまする。帰館の
羽毛。位信大ぎと顔ろ弟桂の仇同道をーみるく附添敬云固ろ館とさしてうり
けう砂ろ岩橋不破名古屋涙人ありてそ。ばいとまの出ここの出ぞ家小長拔ハ厨へ

なそれ。岩橋ハ早とこの場とのりの妻ハ後不どありとう元まさるトもんとちそを表げ
勝が。出ぞ〳〵まちられ。イハ用ぐとさうまするうイヤ別ぐ用もぐ〳〵ぬさるうるりとうーーそ
イヤ未練ろるうぐどるうふまー恨ばあっ。重傷とのとーーさるが女ろーべうんぞのやふこの
元まが知らるも。イヤそちちゆも賢ぶあらうぶあるりーだうで返欲もるくその短冊のーー猪
で訪ありそそー伴たう俗小中せばうまふ返刃のうへやるうるーハ破ぞかぶれ是非とも父
よるまあ元まと。市奉公のうちるれば不義ハお家のかこハ法度。そんるーなんで横を
やぶり山三へ返欲の短冊ハサァそれい元まこそハ脇軍の病ひとこひの出ぞ折り
まひ。その病ひこそまるとハ偽ろ。ヤそるーー貴殿ハ作病ろ。父山左衛門横死の後ひと
まねばひ伴脇まるり伺ってこそ父の仇敵イヤサやこそ館のなかより涙せを樂み善ひ
あろのかるうさん。刀まるはて岩橋ハ伴ども義ふ。イヤ杜者ばイヤそれば〳〵ばトたばひあっ
そ小中ぞ〳〵ぞ岩ちばモレかるうさんマカトまってぐきんせばひふ拔む刀の意見地もぐ
きあるとハいれ岩ハ出伴ハ入り男ハ入り。いづこが何れとけばこれい。心定まるそれ方ーそ

八千代をかけてとこしへぶ。さて彼のあの金澤の國の美女が池ふるぞくく。ハテ何とぞる
上里殿元春たちあがり今と盛りの櫻の枝さぞくく抜ト云ぞ切りて左右より二人
が心底。まことのこゝろ。いづまとゆけの花と緑りん。同じ櫻の枝をぐうとくび重ねる
ハ花ト名古屋ハさ山さきくの枝をまこまび重箱いくて舟どもぐうぞい花ぞ
崩ハまことの通りトうち散くゝ女ハ。落花ぞとび枝小鳥らびあきぐめらるぞ重箱ぐう
ヤア。元春さこの代枝い水ぎい清くきうとして切口すぐるこの櫻それふうく人ぞ指さる
の代花ハはまふ切れくハ。のぐこゝろうて私ぐ生られぬ。ハチぜひもるゝ目の
毒さうよぐん悩ハぐれるゝどるゝ牧心代元春ぐハけうハけの花と。紅ゝ代
今者ぐ。ハテ新枕。ハテくゝぞほい。ハ春雨ぐトありあ傘ぐて山岩ゝ二人ぐ中
ぞさ山れハ元春ぐ人とも傘ぐう出ぞハ。ハ目ぐうけ代春雨ぐ出ぞ
神ぞこぐさくく傘と会て丁度三年傘。そんるくぐどもト重箱ハれんのあり
さる折くゝ雷鳴ぐうくりふくて。ぐうう光る稲妻ぐ岩ゝ山ぐう代元ぐふぐうと

よりそふこれぞ妹伏の縁の糸むすび初めとぞ。これより代所よりく柏子幕

第二章

鈴ぐ森の場

孫ぐう浪の音すぐ。美ぐ驛路の鈴ぐ森松の並木のくゝ小雲助大勢集ぞ
居て焚火ぐあぐう酒のかん実一斗の喜見城。ぐるぐど灰ハみぐくるぐぞ今美れさ
と思ぐくモウ東海寺の五ぐぞうる。いくあんまり仕夏ぐれぐよぐうく延喜ぐうりの
ぐの酒もたちまち一斗ぐうくく其拍ぐ悔むる今ゆも鉢鳥ぐかりまぐまんぐぐれど
それもさうく人モウ一口ぐうハせうトさぐつぐ人ぐ欲とぐう人二人連ぐち巻ぐつ。サア寂ぐ
の山別ぐよくゝやアぐれ。コレサさうぐいるぐちゃア一言も様ぐ見ぐゆアぐ訳のあぐぐ口ぐけ為ぐう
まいくゝ様ハきりく金ぐ出ぐやアぐれ。それぐもまぐふ金ハれよ。ぐいとぐうて流ぐのぐト法ぐう
あぐ以前の雲ぐ刻て入り。ぐりやア坊主ぐ入りの雲ぐ様ぐやアれぐうぐ。ヨ俗ぐこれ
ぐ用ハぐうぐ佐々木の家中で本左助市とぐのれぐ所上ぐ口ぐうぐ
今ぐハ浪人ぐ仲ぐ入りもぐうハ素人ぐ鎌倉ぐあぐうぐ公ぐぐくくぐれぐ今日大師川

原でぬっと金てて武男の横ッ面へ大まんの三百両とゆ大仕事首尾よく為て渡ッた
ところが割まるもよこさぬよまぬんとてドサ前ちゃ丸のこふされちゃあめくらが商売
がるくわへ為ッ為どさうゆられわやッ面目ないがまあれがらるを笠そぐ女人。何をのそと
がゆるめうイ物そへ奴ぎきりく金を牛やッがれ。ドテサ訳を笠てうくあそぐうとなるみ
そんるませうこむ女人モシこりやッぞうしこのぐ今アノ雲哲がい通り無心乗ごてうら
三合とうくこうちへうこうり隠ーあまるこ女人例まあこ雪駄直ーの紙の中へ
その三百両のうちと外小判も智ぐ紀太郎の品を一寸隠ーこあが雪駄ゆりい
あれをうつけて盗賊々々とうく大勢よあそうち打擲金のあいぐ金く命ゆうぐ
逃て来こ所でこの雲哲こうまこのサ。イヤその云訳いのこ込ね。コレサ那男もあふ
さいでおうくうまんぐこ嘘でもあるめ。十二サ助ゆて嘘が出るのうこれぐんのむぐ青
折ぐそん為間ぬけやッいう紙仲生入りをてよくえあるが紙。そんるくを乞ゆ肩まを
新糸ぶるまいハ階まんの田樂。十二サ浜川のあるごとちゃせう。そいつい流ゆうへト

吐ーー家中向ふよう飛脚体の男あとあり賀茂龍ゆ二入り法紀そひ。モシ親方ゆぐ
ゆ弦ちんで為てんゆせ人。ア為ッこん飛御ゆがかるゆ紀よ為ゆい山越ゆうぐ。さうぞあ
らうゆ代ぬッそうゆ鈴ゆ森一人りあう紀をあゆうトうり為て行ゆせ不よ。ユやうまひ雲
ゆめくぶ十三雲ゆぐと。ア寺の長い。そいうそ為んのめせく。合点ぐくト大勢ようて取
まけば飛御の男ハ丸ぐまんこ。ア寺の長い。そいうそ為んのめせく。合点ぐくト大勢ようて取
変ぐこ三百両のゆ用金を落ーこ。何三百あまるト雲哲ゆ出今の大臣の大
金ハこうゆ所持サ。ヤアうぬハさうき己み酒を飲せこ坊主ゆそんるくその時とう
まこうゆ。金ハこうてゆ亦のゆされこせあその腰命こうと丸ゆうこ剥げ。合点ぐ大勢
ゆり飛御の男ゆ丸果体。これハ又情ゆ果體で道中ゆうゆのう盗人こトいて
逃て行ゆ小ゆり。アハハ大笑ひこひッくゆあて路費ゆ武糸とまを車ヨまぐこんるゆ代ぐ
ゆる中ハ代紙ぐゆんぐ仕支ゆまゆあう坡て漢でゆうゆく。おくくゆ一字も続枝和
尚続んでぐうーーさ出ぐ雲哲ゆふとり。十二く飛札をゆくゆ中ゆ尚三月九日ゆ

夜本庄助太夫の悴因州の浪士白井権八と申すもの叔父助太夫を討て立のき
中ゆゑ此度御届申上奉る権八義は江戸表へ出府と存ずればその地にて吟味
専一に存ず●やかましいやァおまへが実の親父を悴の権八が討ましたその状知
らずすぞこの儀は大変ぞ●ハアそんなら貴さまのためには権八といふは親の敵ぞの●さうヨその
権八といふものはまだ前髪ざかりの若衆に似合ぬ不敵なものさ●まそくぞそんなら奴こそ
餌又がおるで来て大森の駿河屋に立て居た●ッしく丸に井の字の紋どころの小袖
を着てゐる大若衆だ●そその丸に井の字こそ権八に違ひなし爰へ来るコリャァ
和りてはおられねへ●コレサく何でそんなに力みなさる●いふとあの為には親の敵じゃ扣へ
出合ふところは我らも助太刀してやるから敵討には能場所で出会ふ●ぞそうると
どふぞしてお望が権八にあふ●おまへも原は侍じゃァ扣へ●なるほど親のかたきも
討といふが勘当さまの他人まづ夫よりはさつきの雪駄をさげて三百両と
大切な一巻をとり返してこなさへいちふに叶けてやるぞ●今爰へ来る親の敵の権八を

みんな寄って討てくださせへ●そんならぞうでもこなさんは●おとして居られぬへト一さんに逃て
ゆく跡には雲助大勢ならび●ハテ臆病なやつだナア●あの権八と申すは身をこそろぐ
何ふせイたった一人●こっちは大ぜい殊に路用はあろうぞらう●ヤシく向ふへ挑灯が入る
大かた那ぢやらうトいふれば菰をかぶり焚火にあたり待ところへかかる籠に乗る一人の若
衆道をとゞめて来りしが先棒の雲助●モシ旦那おやくそくの所迄まゐりました●おりて
下さんまし ト此方より権八がもより立合ふが此が観音前と申す所でござりさ
●ヤレく大儀であった誠に夜中といひ知れざる道中がおのれは浜辺だ●さあらそで
ございますぞ駄賃がありゆへはござりません●なれど極めの賃銭川端より五番
丈のところなれど夜その前をこれをきりに取て置けト南鐐一片さし出せば雲助ろけとり
●コリヤァ二朱の棒組なも●コウ二朱や三朱ならうといふてば夜半をあおせくれからそのでんせん
ト此方より権八枕とそこなふに●シテどれほど取らうと申すのか●己れ木も見からたるをかきわれの
ある金は有ったけさ●枕は不知案内の独り旅とあなどって云ぬらは物でござる●知れたこと

そのうんでうろうろと蔦を伝前の雲火起あり。コレくゐあのこちやア何ともうのぞ。コレハく
待さぬうけあわれば無法なるもとやらら。怪ち服ぐうあませうが見がりんのかくん
ふ捧うちとあらアかつうけんうきれませあらうらハうこてどもがらひぶんぐこざりまあ。コレハく
乗うそんぞうシテ見入より品川宿までいろうじあるモウ小ーぐこざりまもアア寛りゆと
ヨメまふ彩でも口上ちませ。イヤ拙者多々彩ハ所望でるんこれいろんせ紙であること約ん
とまるを方塞り。コレ旅人ひとま道をヨ身祝て禮もらぐでま通るのう。ソレこまを彩を春わと
いへ所望でるのとヨメを彩ぐ春りまあアちあ人。コレ何ぐう雲火ぐと思つて安く十ろのぐ
。コレ身こちぐ雲助ぐう所のあのぐう身ぐ知るのう實ホヨヨを彩ハ婦ひあ人所でうぐ
ろんとまこぐ如何いうこと無法ヤスとうハ見ぞト力のつくふくあ舞まハ。コリや且那さるか
気のみどう今のあうふヤこのハあれハ空言でこざりまん流石ハ武家さるこれうこエーが
遅うあげ世セイトいひつ加の挑灯とり棹ハ紋を見て。松を丸十丼の字ぞト大勢力
一度すとめ死ちせハ棹八強き。まるくだまま丼の字をヤスうハ叔ハうこハ何者ぞう槙ま

まこうを。まこうを肩こ掛つちあうろ合点ぞト雲火どる大ぜい一度ヨそうる。心得こうト棹八を
大力ぬ死ぐ。日ごろの女結ハけとあこうを幸ひ切てまうろ秋の木の系をちぐが如く
無流れて紅葉ま似こり一人の雲火ぐうしぐまる松の木へまひより息をこうして居こう
けりとりうう向へ一人の旅人ぐまる彩ふうちのり本こりーぐ体ぐうより如ぐ帯ぐもハ
棹八を捨てあげ月あくかるの旅人ハ意とあげ月の光りふまこうこて。か若いの待ぐ春り
まートいうまこう棹八刃のあくー。旅のか方ぐう存ぜぬぐ待とは意るまこうふ見どものこと
ぐこざりまもうら。まこうぐこざりまハトいひつ拙の草履をこり中より出こう。鎌倉力
のか在敷へ多く出入のこりぐせうぐ夫ぐと依拠ありまうハ棹出ぞんぶん江の岩の太ぐか
けて思りぬ陳へ今ぐ泊りハ品川と川端ぐうの戻り如ぐ彩通りかうこ鈴ぐのり若いか
方のかまのうちハ品川人ヨと感心こうまこうト考見あうぞて棹八ゲ。常ぐも不敏きこなま
兵法ハ恥こうぐんどまハ。人ぐうけまうれハ未こハ前ぐ彩のか侍さるか独り旅でこざり
まこうる。ハ覚のと乗り某ハ侍ぐも存ぜぬ東路中國筋ぐうたくぐと彩る小及んぐ磯

陰ふ孤客と慢つ！無法過言のくも奴どもきゑつ ホハまそてく 逐落し命をとろも
殺生とぞんじこうれど附あぐり止支を浮ぞ不敵のゆ共ども往来の人のあゆもと斯の仕
合せ雑子も鳴らまいうこれまふよ益ひるゆ●公テ大丈夫切られと奴ぞい六七人那
方さ面ふいたつこお獨若年のおもぎいゆ七強ぞりますこ口外いくうませぬ方ハお納ちき
れませトおこうのなまじ●只今兼りまするまじ中國飾と名ちぞりますばシテ江戸おそへい
何用こさろく●サて別の用のもぞてれど絶しく母の絶小ち心ふ思ふ不孝の汚名久
の勘氣氣ふ刀ふく大江戸ハ鍛ふ花と兼り武家奉ハ公ぶいくうす●ゑうどゆ所多の一下
とり兼りまて教ち紀入りちこ事まよろそいお世話いこふるのでもぞりませぬ宿ゆ
ぞもとゆゆぞうゑくの人殺しかゑつひいぞりませぬどこまぞむここが云抜て進まこう
従来塙よ大の名ぞゆふ切ゆるそのお洲ゆまえ人ゆ家名ゆそのゆ先ふ名字ゆ性来
が性格ハ周州の産ふて當時浪人自井拾八とやうスのシテそこ元の内家名ハ同れ
て伝の何りと名ちゆ身分でもぞりませぬが一体が江戸うまれ所ハ住ゑれ角田川

流れとうの氣さんぶい江戸て呼の花川戸幡隨の長兵衛とゆまい●ゑりや中國飾
まぐ呼ある江戸で名高ふ幡隨の●モうそその長兵衛とゆまうふ私が親父でぞり
まま親ふ似ぬ子の奇ち氣すぢあ酒落とうちゆア見ぞどもるの口の氣肩ゆ水道乃
水で育ちうちげゆゆア氣づつ多ちうい奴ゆ〜よけて通ちう多ちう〜向面年のうう
が韋駄天が草羽織をうそ思庶もまのつて来てもびくともせうのでやぞうませぬゆ
なんぞ〜連衆のちう自阿波半島ハ難浪ぞ教ゆふ京そだち吉原崔ちひ
ふつけ金龍山と称ゆるび隅田のゆぞれを前ようけ男の中の男一正ゆでも尋ねそぞり
ま影脂ぞうそ待てをりまに●ぞ十ぞ及ぬそのお初ぞうへ小方奉ちう〜●何ゆそこが
江戸ちゆサトゆちう連ぞちゆんとせーが妥ふ京ふちう多紙が落てぞりまい寸ぬりを
●土て飛札を以て中上ゆ當二月廿日の夜本庄助左衛門州浪人自井拾八手
ゆ伯父助左衛門を討て立の紀中ゆる此陰ハ屋ゆ上ゆ九拾八ゆ江戸表生府と存
いるそのゆ地中吟味専一まぞんじまりゆ〜ちうハ顔ぞ戸ありぞく拾八ぞゆ名字も

白井●工●イヤ これでゆるしゆも白井氏トなるやくゆ紙をゆ紙すてる●武士も及ばぬ前
の流れをつれだ上の松ゲ枝あやし沈曲者枝八ゆそやく小づりのゆ裏創あやまつぞ
●枝八ゆ枝ト抱つけば長ゆ糸ゆ ゆまきてくまるゆ同ゆト一刀ゆ切ころせば
七ゆ切ゆ切ゆ切ゆ●滿枝ゆのゆ●ゆりと江戸であひませうト
よろしく指子幕

比翼紋意氣地競二編

近刻 山三隱家の場 仲の町鞘當の場 八百善別莊の場

東都 香蝶樓國貞画

全本筆畊 江戸 谷金川書

肖像彫工 仝 村越桑藏刀

せけんむらい中屋の美艶仙女香一包 四ツ角 坂本氏製
美玄香一貝 四ツ角 坂本氏製

比翼紋意氣地競初編下之巻終